

## V. 支援教育研究

### 目 次

- 1 はじめに
- 2 すべての子どもが意欲的に学び 居場所を見つけられる学校づくり
- 3 通常の学級における支援を視点に入れた授業づくり
- 4 コロナ禍での学級におけるユニバーサルデザイン
- 5 ユニバーサルデザインを取入れた授業づくり

# 1 はじめに

## 1 支援教育の調査研究について

茨木っ子プラン ネクスト 5.0 において、「ともに学びともに育つ教育を進める」を最重点の取組みの1つとし、発達や愛着等に課題のある子どもたちへの取組みに重点をおいている。支援教育の観点を全ての教育活動の基盤とし、「全ての子どもが、学びたい、学びやすい安心の学校づくり」をめざし、今年度は、支援教育研究協力校において、中学校では梅花女子大学 伊丹昌一教授、小学校では元神戸親和女子大学准教授 森田安徳氏にご指導をいただきながら、研究授業や巡回相談、ユニバーサルデザインを取り入れた授業づくり等を各学校が実践を進めた。

## 2 研究テーマ

全体テーマ：「全ての子どもが、学びたい、学びやすい安心の学校づくり」  
各協力校の研究テーマは下記のとおりである。

A 中学校	「すべての子どもが意欲的に学び 居場所を見つけられる学校づくり」
B 中学校	「通常の学級における支援を視点に入れた授業づくり」
C 小学校	「コロナ禍の学級におけるユニバーサルデザイン」
D 小学校	「ユニバーサルデザインを取り入れた授業づくり」

## 3 活動概要

### 支援教育研究員連絡会

アドバイザーの年4回の学校訪問を行いながら、各校の研究内容を交流し研究を深めていった。

第1回：支援教育部門研究会について

第2回：各研究による今年度の目標（研究テーマ）の設定を報告

第3回：各研究の研究テーマ及び進捗状況の報告・交流

第4回：報告会の準備

令和3年に開催された茨木市教育センター研究報告会において、2名の研究員が発表を行った。

## 2 すべての子どもが意欲的に学び居場所を見つけられる学校づくり

前谷 聖人

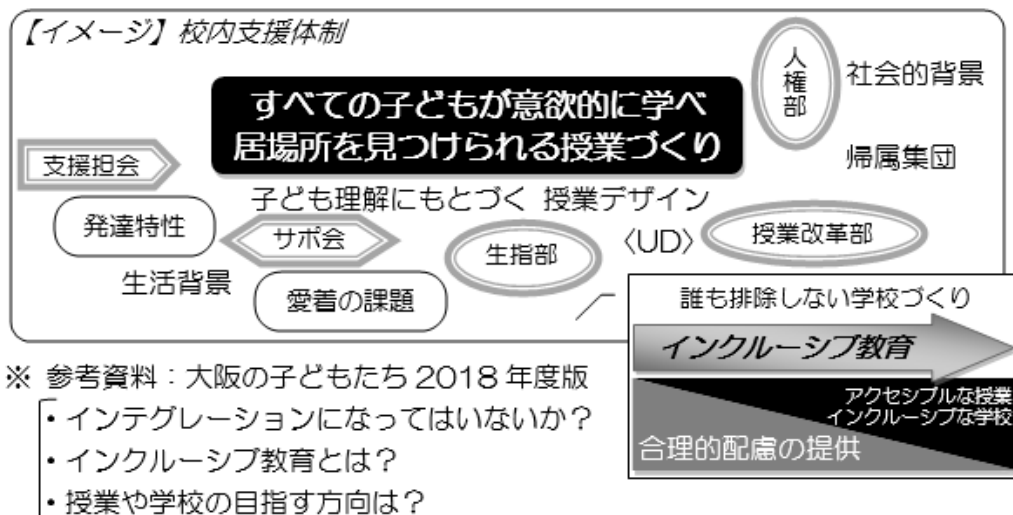
### 1 はじめに

本中学校区は「学びの共同体」を軸とした、聴き合い学び合い高め合う授業づくりを進めている。「一人ひとりの学ぶ権利を保障する（全員が学習に参加する）」という考え方に基づき、男女混合の4人班で協同学習を行う。すべての子どもが学びからこぼれ落ちないようにするために、教員は授業の中で、子どもと子どもをつなぐことを重視する。子ども同士をつなぐためには、子ども理解を基礎に授業をデザインすることが当然必要となり、子ども理解を深めるためには、子どもの実態をより正確に把握し、連携できるような支援体制が必要である。

### 2 取組み

#### (1) 生徒指導部との連携

これまでも支援教育コーディネーターは、推進会議・人権教育部会議・スクールサポーター会議を通して情報共有や発信等を行い、生徒指導部やSSW、SCとも連携してきた。校内支援委員会で提案した校内支援体制は以下の通りである。



#### (2) 伊丹昌一教授による支援研修

夏は「通常の学級での支援を必要とする子どもへの支援方法」というテーマで研修を行った。発達特性のある子どもの特徴や支援方法、心理検査結果の解釈や支援方法、生まれながらの特性と二次的な行動を見きわめてかかわること、特性による愛着関係の築きにくさや支える保護者に寄り添うことの大切さ。ポジティブな行動支援、これからの生徒指導など、講話内容は多岐にわたったが、子どもの笑顔のために教育現場で何ができるのかを問い直す機会となった。

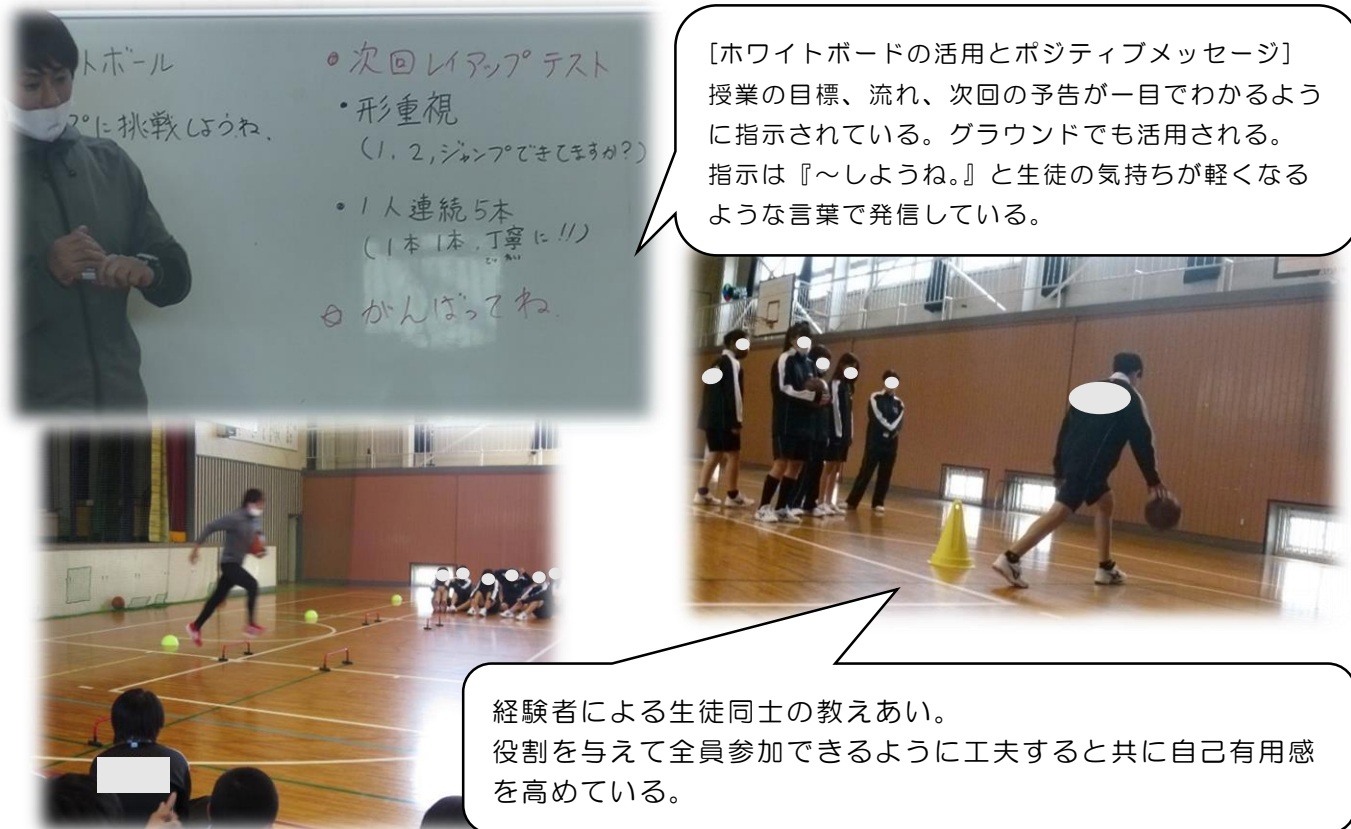
#### (3) 尾藤祥子先生による合理的配慮指導

学習態度が気になる生徒の普段の授業を見ていただき、ご助言をいただいた。机周辺の整理、身体に合った机やイスの高さを整える、机の配置に工夫することで、本人の疲労感、集中力、脊椎や筋肉への影響など、改善できることを学ぶことができた。

そこで全学年一斉にカバンの置き場所の指定、机の配置の指定を行った。小さな支援が子ども達に大きく響く可能性を感じることができた。

#### (4) 研究授業：2年生 体育：バスケットボール「～レイアップシュートの基本技能～」

今年度は、「すべての子どもが意欲的に学び居場所を見つけられる学校づくり」をテーマに授業研究を進めた。秋には体育で研究授業を行った。教室とは違った表情を見せる子ども達の様子から、目線をかえて教室でも有効な手立てや授業デザインについて意見交流することができた。



#### (5) 巡回相談

子どもたちは、喜びや困り感を様々なかたちで表現する。行動や言葉の背景を知り、本人や保護者の思いに寄り添いながら、育ちを支援していくよう助言があった。巡回相談後には、学年を中心として支援方法やかかわり方を協議し、共通の認識を持って取り組むことができた。

### 3 取組みの成果と今後の課題

研究校としての2年目を終えようとしている。研修や子どもたちの姿を通して、子どもを中心に据えたユニバーサルデザインの授業づくりや支援のあり方について考える機会は増えた。特に、授業開始時に授業の流れを提示することで、生徒が見通しを持つことができてきている。今後はこれまでやってきた取り組みを継続していくことが必要である。また、教員だけがユニバーサルデザインの実感を得るのではなく、生徒にもユニバーサルデザインは必要と思える働きかけを推進していくことが課題であると考えている。

### 3 通常の学級における支援を視点に入れた授業づくり

山本 靖子

#### 1 はじめに

ここ数年、本校では支援学級に在籍する生徒が増加している。障害の状況が多様化し、身体障害や病弱等、専門的な知識や配慮が必要な生徒が増加している。また、通常の学級でも個別の対応が必要な生徒が増え、「これまでと同じような授業では学習内容の理解が難しいようだ」「配慮の必要性はわかるが、中学校の教育課程を進めるためにどのくらい個別の支援をすればよいか悩む」といった声が教員から聞かれるようになった。そこで、昨年度から、支援教育研究協力校として研究を進めることになった。

#### 2 今年度の取り組み

特別支援教育アドバイザーとして、梅花女子大学の伊丹昌一教授に授業中の生徒の様子を観察し、講話で本校の実態に合わせたアドバイスをいただいた。

##### (1) 通常の学級での支援

通常の学級で支援を必要とする生徒の中には、一斉指示だけで行動できない、学習活動に取り組めない生徒がいる。

発達症特性のある生徒が指示を聞いていない時、ASD（自閉スペクトラム症）の場合は「興味が持てないことを聞いていない」「聞くより見て理解する方が得意」、ADHD（注意欠陥多動症）の場合は「他のことに注意がそれてしまう」など、背景となる要因により理由が異なる。そのことを考慮して支援の方法を考えた結果、「集中しやすいように黒板周りの掲示物を減らす」「授業のめあてや流れを黒板に提示する」「1回に指示する内容を少なくする」などが、どの授業でもおこなわれるようになった。教科によっては、学年や担当者が変わっても困らないように「授業の流れや指示の仕方を統一する」「ワークシートを電子黒板に提示して、今学習しているところを生徒が確認しやすくする」など、工夫をしている。

提出物を期日に出せない、保護者への連絡物の受け渡しがきちんとできない生徒への対応も全学年共通の課題である。どのクラスも「教科連絡を記入する場所を固定する」「課題の提出日を口頭だけでなく掲示して連絡する」ことを徹底している。

一斉指示の理解や課題の提出、保護者への連絡などは、中学校生活だけでなく、卒業後の生活でも必要な能力である。「将来自分でできないと困るのだから、いつまでも手を貸してはいけないのではないか」という意見もある。中学生になった途端に切り離すのではなく、1年は丁寧に、学年が上がるにつれて一人でできるように段階的に支援の度合いを減らすように考えている。

また、学校生活全般で「対人関係のトラブルが多い」「自分の気持ちや行動をうまく調整できない」という生徒がいる。ASD（自閉スペクトラム症）の場合は「人と親しくするのが難しい」、ADHD（注意欠陥多動症）の場合は「人との距離感が理解しにくい」、反応性愛着障害の場合はその背景により「表情の表出が乏

しく、他者に伝わりにくい」「人との距離感が適切でない」「気持ちと裏腹な行動になる」などの特性があるため、これらの問題が生じる。「大人との信頼関係をつくる」「気持ちを聞き取り、生徒がうまく話せない部分を言語化する」「みんなの役に立っていると思わせる」ことが支援の方法として大切である。気になる様子の生徒がいれば休み時間に職員室で生徒の話をし、次の授業担当者にも声をかける。たくさんの教員が見守っていることが生徒にわかるような関わりを日常的に行っている。

## (2) 合理的配慮

支援学級在籍生徒が通常の学級で授業を受ける場合に行われる合理的配慮についても、昨年度から継続して検討を重ねてきた。

合理的配慮とは、学校生活で障害のある生徒もみんなと同じ活動をするために、本人の希望により個別に必要な配慮をすることである。

姿勢保持が難しく、細かい作業に集中することや書字に課題がある生徒について、板書の取り方や問題集などの取組み方について、さまざまな方法を試した。「座席から見えにくい位置の板書をタブレットのカメラ機能で撮影して、手元で拡大して確認する」「書くことに時間をかけるより教員の話を聞くことに集中する」「時間がかかる手書きより問題を多く解くことを重視してタブレット入力し、プリントアウトしたものを提出する」等、生徒の障害の状況や学習理解の状況に合わせて、どのような配慮をするか考えるが、その際に、特定の教員だけが対応できることではなく、どの教員でも対応できる内容になるように調整した。定期テストでは、本人・保護者と相談の上、問題用紙の拡大やルビ打ち、問題文の読み上げなどの合理的配慮をしている。

## (3) 情報共有

本校では、個別の指導計画の作成にすべての教員が関わり、毎週の学年会議と毎月の職員会議で、支援の必要な生徒の情報共有のための時間を確保している。支援学級や通級指導教室に在籍する生徒だけでなく、個別の指導計画を作成している生徒がすべてのクラスに複数在籍している。そのためすべての学習場面で支援教育の視点を持った取組みが求められる。それぞれの生徒の状況や必要な支援について全教員が共有できるようにしている。

## 3 おわりに

令和3年度から本格実施になる学習指導要領の解説では「通常の学級にも、障害のある生徒のみならず、教育上特別の支援を必要とする生徒が在籍している可能性があることを前提に、全ての教職員が特別支援教育の目的や意義について十分に理解することが不可欠である」「全ての教職員が障害に関する知識や配慮等についての正しい理解と認識を深め、障害のある生徒などに対する組織的な対応ができるようにしていくことが重要である」と記されている。これからも支援学級担任だけでなく、すべての教員で支援教育を取り組めるようにしていきたい。

## 4 コロナ禍の中での学級におけるユニバーサルデザイン

徳高 常喜

### 1 はじめに

本小学校は茨木市の南西部に位置し阪急電車や大阪モノレールの交通アクセスが便利のために転出、転入の児童が比較的多い校区である。そのために子どもたちの関係が希薄になっているところも見られる。児童数は730名以上を数え近年は増加傾向にある。

今年度は新型コロナウイルスの影響で、春先の自宅待機や分散登校、また授業が始まってもグループ活動等が制限された中での学習だったので、ともに学び合う機会を失うことが多かった。そのような状況の中で支援を必要とする子どもたちも含めて互いに認め合い、ともに育ち合う集団をめざして一人ひとりの実態に合わせた教材や手立てを考えるべく支援教育協力校としてアドバイザーの助言を得て研究をすすめることとなった。

### 2 支援サポートブック

クラスの中には、さまざまな課題がある子どもたちがいる。すべての子どもに対してユニバーサルデザインをはじめとして、必要な支援のあり方を考え、一人ひとりの子どもたちがスムーズに学校生活を送ることができるように、天王小学校では、その支援の方法を集めた支援サポートブックを作成している。

サポートブックは学校生活を気持ちよく送るための「生活編」、学習する力の基本を築きあげる「学習編」の2部構成で全33ページにわたって記載されている。このサポートブックは児童に対してはもちろんのこと新転任の教職員に対しての天王小学校のルールや支援方法についての研修に活用され、その結果として教室での学級経営、授業作りの一助となっている。

この冊子は毎年見直され改定がおこなわれているので、アドバイザーからのアドバイスによって改善点が明確化し、次回の改定に生かされることとなった。

### 3 講話「授業のユニバーサルデザインの基本」

アドバイザーより、学びやすく安心できるという子どもの目線からの講話があった。余分な視覚的刺激的調整、見通しを持ちやすい情報提供の視点から教室環境についてのアドバイスもあった。また、自閉症特性のある子どもの対応として、子どもの気持ちを一旦受け止めることやほめ方のポイントについて具体例を交えて聞くことができた。さらに、指示の明確化、分かりやすい指示の仕方についても話があり講話を通して学校全体での取り組みの方向性を示していただいた。

## 4 巡回相談

授業に集中できずに勝手な発言を繰り返す児童を中心にアドバイザーに観察していただいた。児童の授業の様子から自分のことをよく見てほしいという思いからの行動であると分析された。その上での助言として子どもをほめる大切さ、子どもをほめる授業の展開、授業のねらいを持つことを考えるなど具体的に言葉をかみ砕いてわかりやすく説明していただいた。

## 5 ユニバーサルデザインを取入れた研究授業

事前に送付した授業案からアドバイザーより助言を受けた。「授業の流れを示す」「具体物の用意」「既習事項の確認」「わかりやすい板書」「簡潔な指示」「内容を詰め込まない」「個人活動」「ペア活動、グループ活動」以上の視点から具体的なアドバイスをいただき授業づくりの助けとなった。

上記の助言より、授業の構造化を図り「学習流れ」を組み立てることで、学習の進み具合を掲示し視覚から確認できるようにした。さらに、ヒントカードの用意、導入時に既習事項の確認、指示の簡潔化、活動する形態を提示、話すときの声のトーン、分らないときに聞きやすくする、板書や授業内容の精査、ペア活動等授業の中で大切にしたいユニバーサルデザインを取入れた。

研究授業前日に大阪府に緊急事態宣言が発令され為に、多くの教職員は教室ではなくズームにより別室で授業参観がなされた。さらに、授業内容も学び合う活動が制限された。

研究討議会はアドバイザーから授業で良かった点、改善点を具体的に助言していただき全体で共有することができた。また、2つの事項を相対的に教えていく方法、コンパスの指導方法等、授業の細部にわたってのアドバイスがあった。

- |         |
|---------|
| 学習の流れ   |
| ① めあて   |
| ② もんだい  |
| ③ 見通し   |
| ④ 交流    |
| ⑤ 練習    |
| ⑥ まとめ   |
| ⑦ ふりかえり |

## 6 おわりに

今年度は、給食中も会話できず、大きな声で歌を唄うことも許されず、マスクをしたままで声をかけあうことのない体育、隣の席と離れた状態等、いつもと違う教室の風景だった。そのために、学び合う中で身につく力が身につかないことも多くあり、授業の内容も一方通行になりがちな形態だった。そのような中で視覚支援の視点からユニバーサルデザインが活用される場面も多くありアドバイザーから助言を受けたことが良い方向への力となった。特別なコロナ禍での一年だったが、幸いにも来年度も支援教育協力校としてアドバイザーから助言を受けることのできる立場なので、いつもの生活が戻った中で研究を継続できることを願いたい。



## 5 ユニバーサルデザインを取り入れた授業づくり

寺本 満里

### 1 はじめに

昨年度より支援教育研究部会で「校内のユニバーサルデザインを取り入れた授業づくり」について取り組んでいた。子どもたちの授業や環境をより良くするための発展した研究ができないか検討していた。まず始めに、教室環境のUDを整えることを考えていた。

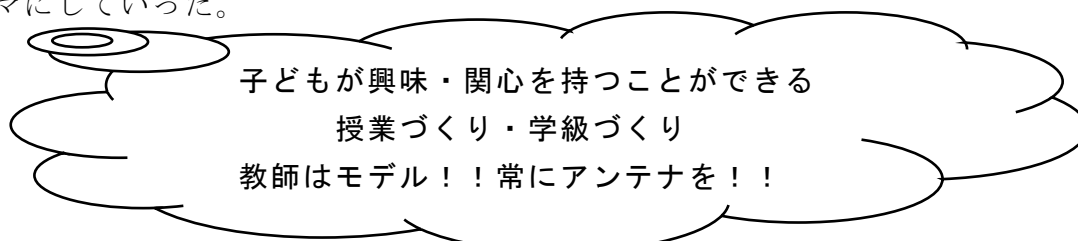
本年度は、支援教育研究協力校アドバイザー派遣事業に際して、一斉授業でどのように指示したら的確に伝わるか、「どの子どもも救える授業づくり」や「誰でもわかる授業づくりの工夫」をどのように展開すればよいのか課題となった。

### 2 取組み

#### (1) 森田安徳先生による全校授業観察

本校は、児童数180名と小規模な学校である。6年生は2クラス、1年～5年生はそれぞれ1クラスである。本校の全学級の児童や教師の授業に取り組む様子や教室環境など観察していただき、校内のUDを取り入れた学習はどのようにすればよいかうかがった。

そこで、森田先生より『授業のUDの基本』の考え方を指導していただいた。UDを取り入れた授業とは、教室環境を整えることではなく、「誰もが学びやすい授業で安心できるクラスにすることである。」と助言いただき、それをもとに今後の研究のテーマにしていった。



①子どもの自信につなげるために、ほめる仕掛けを作り、具体的にほめよう！

②具体的に指示を出そう！

③非言語的行動を意識した授業をしよう！

#### (2) UDを取り入れた授業づくり 研究授業：4年生国語「一つの花」

UDを取り入れた授業づくりができるか取り組んだ。単元目標は「物語の題名の意味について、物語の叙述と結び付けて具体的に考えることができる。」(第1時導入)である。

学習の流れが具体的にわかるように、視覚的支援など黒板掲示で示した。授業案に沿って、教員の発問も一文ずつ考えていった。具体的に指示が出せているか、児童の発言を想定しながら授業を考えた。

教員の指示の出し方をどうすればよいのか、どこでつまずきがあるのか、どんな風に改革が必要なのか気づいた。また、机や椅子の高さなどによっても、学習時に集中度の違いがある事に気づいた。「授業のUDモデル」チェックリストを提案された。授

業づくりの手立てとすることにした。

### (3) 臨時巡回相談

新1年生は、入学式から2か月間、学校生活や学習の基礎作りの時期がずれこみ、学校になじめるような指導や集団づくりができなかった。保護者からも学習面や生活面での相談を受けていた。コロナ禍ではあったが、臨時巡回相談を受けられた。学級での授業の様子からどんな支援方法があるか、どのようなかかわり方をすればよいか協議した。

巡回相談後、その児童の困っている事を具体的に検討し、学習面のサポートと生活面の支援を学校全体で取り組める方法を考えた。

1か月後には、ひらがな検討会を行った。チェック表の見方を知り、分析結果から学級独自の課題を見つけられた。今後の学習で気をつける指導の手立ても助言された。個別に教材を提示していくと、少しずつ学習に向かう意欲が見られた。

### (4) ケース検討 研究授業：3年生国語「モチモチの木」

「授業のUDモデル」チェックリストをもとに、教材研究に取り組んだ。視覚支援教材も多く活用した。児童が活躍できる場面を設定するように、指導の流れを研究していった。支援の必要な児童もその子に応じた発表ができる場面を想定した。発問は具体的に指示を出す、一文ずつ短く言う。教師は、表情や視線、立ち位置を意識して一人ひとりを見ているかなど一斉授業で取り組んだ。単元目標にせまる教材研究も今後の課題として提案された。

アセスメントシートによる児童観察もしていただき、今後の個別の支援対応に役立てることができた。



## 3 おわりに

研究校として1年目を終えようとしている。ユニバーサルデザインを取り入れた授業づくりをようやく研究し始めた。支援教育に向けて児童の実態から研修を進めている。また、『人権学習シリーズ ちがいのとびら 多様性と人権課題』から「障がいとは」、「ちがいのちがい」の学習を行ったが、障がい理解教育を教師や子どもたちがどのような意識をもって取り組んでいけばよいかなど課題はある。引き続き「どの子どもも救える授業づくり」、「誰もが学びやすい授業で安心できるクラスづくり」の実践を積んでいきたい。